

国語（中）部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつける授業の創造
～すべての学習の基礎となる、豊かな言語感覚を育成するために～

2. 主題設定の理由

過去2年間、国語（中）部会では、各教科学習における言語活動の基盤となる言葉力や身に付けた言語能力を活用する「総合的な言語能力」の育成を目指してきた。そのためには、生徒が意欲的に学習活動に取り組もうとする「魅力的な授業」を展開することが必要である。生徒の達成感や仲間との共感・所属感を生み出すことが、魅力的な授業の条件であると考えます。

「教材をどう教えるか」ではなく「教材で何を教えるか」を追究するのが国語科の特徴と言える。だからこそ、教材を深く読み取り、教材価値を明らかにし、「授業のねらい」を明確にして構想を立て、1時間1時間の展開を工夫することが求められる。そうして作られる授業こそ、生徒が目を輝かせて生き生きと学ぶことができる授業になり得るのであり、私たちが目指す確かな国語の力をつけることができるのである。

研究会で公開されるような授業の裏には何十時間も準備があるが、日常の中でこれと同等の労力をさくことは難しい。そこで、共同研究による報告を追試し、データベース化することで「生徒の目が輝いた授業」が部会員全体のものになるのではないかと考えた。

3. 研究仮説

作品の教材価値と授業のねらいを明確にし、実際の指導場面での言語活動の見通しを持ち、授業展開を工夫することが、生徒が生き生きと取り組む授業の創造につながる。

4. 研究内容

①作品の教材価値を見出し「授業のねらい」を明確にした教材構想の工夫

- ・指定教材を設定し、過去の課題を踏まえて個人研究を進める。
- ・二次研究協議会の場で、指定教材をもとに公開授業を行う。
- ・公開授業、個人研究をもとに活発な議論を行う。

②部会員のレポートを追試し、改良を加える試み

- ・昨年度部会員の研究成果を教材ごとにまとめ、事務局より提示する。
- ・過去2年間のいずれかのレポートに沿った、あるいは改良を加えた授業を実践し検証する。

③指導者である教師自身の言語力（知識・言語感覚・読解力など）を高める取り組み

- ・理論（実技）研修会をうけ、各自が実践を行ってレポートを作成し、その成果と課題を交流する。
- ・二次研究会において「指定教材」を共同で教材分析する時間を設ける。

5. 研究方法

- ①各市町村単位で「地域サークル」を組織し、指定教材を中心に地域単位での共同研究を行う。その成果と課題について議論を行なった上、石教研第二次研究協議会に持ち寄る。
- ②中心グループによる研究成果を、専門部会第二次研究協議会において公開授業として発表する。さらに部会協議において、研究主題にせまる研究内容や成果などを部会員によって研究協議する。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

4月14日(火) 石教研第一次研究協議会
 17日(金) 各市町村で第一次研究協議会
 9月8日(火) 各市町村で第二次研究協議会

10月16日(金) 専門部会第二次研究協議会(江別)
 2月5日(金) 各市町村で第三次研究協議会

2. 専門部会第二次研究協議会での交流

(1) 専門部会第二次研究協議会での交流内容



1年生 教材「シカの『落ち穂拾い』フィールドノートの記録から」

授業者：片山 健 教諭(江別市立江別第一中学校)

本時の目標 ・図表の役割や効果をふまえて、伝わりやすい発表をすることができる。
 ・発表を聞き、わかりやすく伝えるための図表の活用効果を再認識できる。〈話す・聞く〉

<本時の展開>

過程	時間	生徒の学習活動	教師のかかわり	留意点
導入	6	○前時までの学習を振り返る。 *図表の役割 *図表使用の着目点 ○学習課題を記入し把握する。	○簡単な発問で前時の内容を想起する。 ○課題を提示する。	穴埋め模造紙 模造紙による課題の黒板への提示
		図表の役割や効果、伝わり方を再認識することができる。		
展開	3	○発表方法(班と全体)とワークシート記入方法を確認する。	○発表や記入方法を確認させる。	観点別評価 ①図表の工夫 ②説得力ある文章 →総合評価による班内代表作品の選出 ワークシート 隊形の復元 班内での推薦理由発表者が司会と実物投影機活用の補助
	12	○班(8班)隊形となって全員が図表を提示し記録文を発表する。	○机間巡視で伝わる工夫を助言する。	
	5	○推薦理由の記入と回覧による意見交流によって班代表作品発表者および推薦理由発表者を決定し、隊形をもとに戻す。 ○各班の推薦理由発表者と代表作品発表者による発表を聞き、記録文と図表との関係や発表者の図表活用理由について考えながらメモをとる。	○代表作品と推薦理由発表者を確認後、本日の発表班を決定する。 ○代表班を指名し、発表させる。聞き手に対してはメモを促す。	
終末	5	○自分の発表の振り返りや代表者発表からの発見や学んだことを本時の課題と照らし合わせて記入する。	○記入によって発表の振り返りや課題への評価を記入させる。	ワークシート
	2	○記入したことの発表や聞き取りによって、本時の課題の振り返りや学習内容の整理をする。	○本時の課題への取り組みや深まりを確認・整理させる。	発表者の指名
	1	○次時の予告を聞いて把握する。	○次時の予告をする。	ワークシートの回収

本時の評価 ・図表の役割や効果をふまえて、伝わりやすい発表をすることができたか。
 ・発表を聞き、わかりやすく伝えるための図表の活用効果を再認識できたか。

<授業者より>

・機器、プレゼンともに初の経験。全体の場での発表慣れをしてほしいと考えた。図の選び方についてはレーダーチャートを使う生徒が多く驚いた。図を選ぶ幅を広げつつ、文章との照らし合わせが大切だと指導した。あくまで国語科として、図表に重点を置きすぎず文章と対応していることが大切であると指導した。



<意見交流>

・表、グラフなどのわかりやすいワークシートがすばらしい。図表の効果というねらいが十分伝わった。生徒が文章を書くための助けにもなっており、発想の豊かな様々な図表が生徒から出された。
 ・全員に活躍の場があり、認められていた。1時間の中に、個→グループ→全体と動きがあり大成功であった。
 ・「印象的な一日の記録」となると客観性に欠けるのかもしれないが、生徒にとっては書きやすい。だからこそ生徒は短い時間で書けたのだろう。あとは教科書のグラフとの違いを押さえればよい。

2年生 教材「君は『最後の晩餐』を知っているか」

授業者：種村泉 教諭（江別市立江別第一中学校）

本時の目標

- ・筆者の文章の工夫と特徴について、言葉の使い方や表現のしかた、論理の展開のしかたに着目して考えることができる。【読む】
- ・評論の文章を読み、内容や表現のしかたについて、自分の考えをまとめることができる。【読む】



<本時の展開>

過程	時間	生徒の学習活動	教師のかかわり	形態	留意点
導入	5分	○ <u>前時の内容を想起する。</u> ・「学習の窓」を読む。 ○ <u>宿題を確認する。</u> ・隣同士で確認する。	・教科書・ノートを開き既習事項を確認させる。 ・机間巡視をし、声を掛ける。	一斉 ペア	ワークシート
課題設定	5分	○ <u>本時の学習内容を確認する。</u> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">筆者の文章の工夫と特徴について考え、自分の考えを持とう。</div>		一斉	板書
解決努力	15分	○ <u>観点に基づき、筆者の文章について分析する。</u> ・観点を確認したあと、4人一組の小グループで話し合う。 *宿題を見せ合い、交流する。 *出された意見を整理し、短冊に記入する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"><予想される内容> 言葉の使い方、表現のしかた：文末、文の長さ、言葉遣い、表現方法 論理の展開のしかた：自分の感じたことを述べ、その理由を分析している。序論、本論、結論。</div>	・「学習3」の観点を確認させる。 *言葉の使い方、表現のしかた *論理の展開のしかた	グループ	4人一組 短冊・ペン準備
定着習熟	15分 5分 5分	○ <u>分析したことを発表する。</u> ・グループで出された意見を交流する。 ○ <u>文章の特徴についてまとめる。</u> ・分類されたものを参考にして、筆者の文章の工夫と特徴を確認する。 ○ <u>本時を振り返り、自己評価をする。</u> ・振り返りシートに記入する。 ○ <u>次時の学習の確認をする。</u>	・短冊を活用、分類する。 ・必要に応じて補足する。 ・筆者の文章の工夫と特徴について、気づいたことをワークシートに書く。 ・次時は新出漢字を学習することを確認する。	一斉 個 個	 ワークシート 振り返りシート

本時の評価

- ・筆者の文章の工夫と特徴について、言葉の使い方や表現のしかた、論理の展開のしかたに着目して考えることができたか。【読む】
- ・評論の文章を読み、内容や表現のしかたについて、自分の考えをまとめることができたか。【読む】

<授業者より>

- ・初めて学習する「評論」という文章との出会いを大切にさせたい。意見が出やすいように、ヒントを与えたプリントを宿題にして、それをもとに4人グループで話し合い発表させた。班の交流で、筆者の文章の工夫と特徴を捉えることはできた。ただし、それに対する自分の考えを導くところまでは至らなかった。

<意見交流>

- ・生徒の意見を授業で全て取り上げるためには、宿題を効果的に与えることが必要だと感じた。
- ・黒板に貼るカードの使い方がよい。大きさも適切であり意見がたくさん出されているものが視覚的にわかる。そのような効果まで考えられていてとてもよかった。「書くこと」にもつながる授業であった。
- ・どの班の意見も大事にしている。自分の考えが活かされていることが伝わってくる授業だった。
- ・分類させる場所を考える力のある生徒なので、効果や根拠も考えさせてもよかったのでは。
- ・ゴール地点は、やはり自分の考えを持たせることであろう。授業では時間のやりくりが難しい。



3年生 単元・教材名 深まる学びへ「握手」

授業者：川村香織 教諭（江別市立大麻中学校）

- 本時の目標：①登場人物の生き方や考え方、作品の構成などに関心をもって読み、批評しようとしている。
 ②場面や登場人物の設定、社会背景、表現などに注目し、内容をとらえて批評することができる。
 ③解釈を基に適切な言葉を使って作品に対する批評を行うことができる。

<本時の展開>

時間	生徒の学習活動	教師のかかわり	評価規準（評価方法）
5分	○前時を振り返る。 ・作品分析の学習用語と批評の観点の確認。 ○批評のポイントを確認する。	・カードにして提示する。	
『握手』をみんなはどう読んだのか交流しよう			
15分	○同じ観点で批評したグループで交流する。 ○批評のポイント（視点）に従って批評文を選ぶ。 ・良く書けている部分に線を引く。 ・代表生徒以外の批評も付け足して発表する。	・観点別のグループを編成する。 ・批評の読み方を説明する。 ・批評文のどの点がよかったのかを発表するように指示する。	・グループや全体で批評を交流させることができたか。
15分	○批評文を発表する。	・書画カメラに写す。 ・根拠をもっと発表するように促す ・批評の発表方法を支援する。	・根拠をもとに批評をまとめているか。
6分	○発表を聞いて、自分の批評と比べて、感じたことをまとめる。	・深まったこと、共感したことを書く。	
6分	○交流する。	・数名を指名し、記述した内容を全体で共有する。	
3分	○学習カードに本時の感想を書く。	・今日の学びの成果を振り返り記述するように促す。	

<授業者より>

・「握手」で批評を書かせるにあたって、先に「月の起源を探る」で観点を決めて書くという授業を行った。その後「批評の言葉をためる」を行い、今回の「握手」の批評という流れを組んだ。批評の交流は、グループで良かったものを一つ取り上げたが、多くの生徒の文章に光る点があったので、それも紹介したかった。ただ全体交流の中で「心情をより深く知れた」「次はこの言葉を自分の批評に使ってみたい」などの次につながる意欲を引き出したのはよかった。



<意見交流>

- ・批評は中学生には大人っぽく難しいものだが、人の考えや思いを知るという点に重点を置き指導するとおもしろい。
- ・批評は先に書くのがよいのか、後に書くのがよいのかという議論もあるが、今回の授業では「単元を貫く言語活動」がしっかり意識されており、そのことこそが大切である。
- ・語彙力も豊富で考えも成熟している生徒たちなので、批評の交流にとどまらず、交流後の再構築まで高めていけたのではないか。
- ・文字情報が苦手、書くことが苦手という生徒へは、まず真似をすることから始めさせたい。感想というスタイルでもよいので、まず書かせるようにしたい。
- ・豊かな語彙力の育成のためには、「書くこと」を日常的にさせる。わからない言葉をすぐに調べられるように辞書を必ず手元に置くこと、日直がニュースを発表したりまとめたりする活動が効果的ではないか。



討議の柱

この教材で何をどう教えるか？～追実践を中心に～
言語活動実践の交流



分科会① <レポート交流>

学年ごとにレポート交流を行った。新教科書になり4年目となる今年も「追実践」をコンセプトにレポート作成を行った。指定教材に対する多くの実践が寄せられ、教師のねらいに即した様々な言語活動が紹介された。教材研究のみならず言語活動研究において深まりが得られた。以下、学年別に中心となった話題についてまとめた。

1年生

教材【星の花が降るころに】【大人になれなかった弟たちに】【シカの落ち穂拾い】【ちょっと立ち止まって】

- ・単元学習計画を生徒に配布する。 ・心理、行動、情景から心情を読み取る先生に挑戦コーナー。
- ・自分の意見を述べる言語活動を1～3年同じ流れで行う。 ・グラフから読み取り自分の言葉で書く。
- ・接続語、中心文、事実と意見の区別。 ・図表→5W1H→日記作り ・ペアワーク、グループ学習
- ・三段構成→スピーチ ・国語科通信の発行（きっかけを与えてあげられれば）。

2年生

教材【君は「最後の晩餐」を知っているか】【モアイは語る】【やさしい日本語】【盆土産】【旅する絵描き】

- ・評論文と説明文の違いを考えさせる。 ・文章の魅力について考え評論文を書く活動につなげる。
- ・授業の終わりに2分間で授業のまとめスピーチを行う。 ・ジグソー交流法で長所短所をまとめる。
- ・タブレットを使った実践。 ・登場人物になったつもりで生活体験文を書く。
- ・小学校の教科書を参考に（6年生で「春はあけぼの ～づくし」は学習している）。

3年生

教材【握手】【蟬の声】【高瀬舟】【月の起源を探る】

- ・描写作文から課題作文へ。 ・毎時間必ず書く機会を設け「感想と疑問点」を日常化させる。
- ・高瀬舟での一人ディベート。 ・同じ教材をいろんな年齢で読むことにも意味がある。見方が変わる。
- ・条件作文をどんどん書かせて廊下に掲示する。 ・小学校6年生での漢文指導の活用。
- ・小グループで作品を作り交流してお互いのよさを認め合う活動。 ・現代語訳短歌の作成。

分科会② <小グループでの共同教材分析>

学年ごと小グループに分かれて共同分析を行った。テーマは「教材文『幻の魚は生きていた』においてどのような言語活動を展開するか」。指導事項と授業者のねらいを明確にした上での「言語活動研究」がなされた。「ニュースを作る」「プレゼンをする」「紙芝居を作る」「仮想博物館の展示物を考える」「壁新聞のトップ記事を考える」「七五調の歌を5番まで作る」など、どのグループからもユニークなアイディアが出され、国語科の授業の奥深さに改めて気づかされる時間であった。



Ⅲ. 教育課程の研究

新教科書となり4年目。今年度も「追実践」をテーマに据え、教科書教材の分析についてさらなる研究の深まりを得た年となった。また二次研究協議会では、新しく採択される教材の共同研究も行い来年度に向けて弾みをつけた。以前より取り組んできた「教材研究」の視点はもとより、今年度は「言語活動」に重点をおいた授業デザイン研究の視点からも研究を深めることができた。このことにより「生徒が生き生きと取り組む」という目標に向けて新たな手応えをつかむことができた。次年度以降も、学習指導要領にもとづき、これまで積み重ねられてきた実践・研究成果を活かしながら、部会員の意見・要望を集約して編成・改訂を行っていききたい。

IV. 実技・理論研修会

1. 理論研修会

- (1) 日時 9月7日(月) 15:00~16:30
- (2) 場所 石狩教育研修センター
- (3) 講師 宋我部義則氏 (お茶の水女子大附属中学校)
- (4) 演題 わかった!できた!楽しくて力のつく授業に 言語活動と
おして、思考・判断・表現の力を育てる国語の授業づくり
- (5) 内容 ①生徒が主体的に学ぶ言語活動研究(授業デザイン)の必要性について
②実際の教科書教材を用いての実践例の紹介



2. 実技研修会

- (1) 日時 11月16日(月) 15:00~16:30
- (2) 場所 江別市立野幌中学校
- (3) 内容 中学1年 教材「私が選んだこの一冊」より
①ブックトーク ②本の紹介箱作り体験



理論・実技研修会の成果

理論研究会では、さまざまなタイプの言語活動実践を紹介していただいた。読める力、書ける力、表現できる力を育てるための授業デザイン、つまり「教材研究」+「言語活動研究」の必要性を参加者全員が痛感した。研修後のアンケートには全員から「有意義であった」との回答を受け、「ぜひ第2弾を!」という意見をたくさん得た。

実技研修会では、「読書活動」として教科書に取り上げられている教材について体験的に研究を深めることができた。自分の好きな本についてじっくり語り紹介箱を作成することで、教材の魅力を再認識した。また、単元の指導計画についても議論され、次年度に向けて弾みをつけることができた。

V. 部会研究の成果と課題

<成果>

昨年度より展開してきた二年次研究の結びとなった今年度。目標は「生徒が生き生きと取り組む」ことと、「確かな国語の力をつける」ことの両立であった。追試、改良の試みをテーマに据え、幅広い指定教材について多くの実践を交流、協議してきた。その中で「教材をどう教えるか」ではなく「教材で何を教えるか」という教材研究の視点については二年間を通し深めることができた。「確かな国語の力」とは何か、という大きな問に対するヒントを多くの部会員に示すことができたのではないかと考える。さらには、その「国語力」をどう身につけさせるか、という「言語活動研究」の視点からも深まりが得られた。二次研究協議会では、言語活動の視点から教材の共同研究を行い、国語科の授業展開は無限の可能性を秘めていることを実感した。「すべての学習の基礎となる豊かな言語感覚の育成」は確かに国語科に課せられた使命である。ならば、国語科教育に携わる者として誇りを持ち、その魅力を十分に享受するべく研究を邁進させるべきである。次年度以降も、部会員全員の協力のもと研究をさらに深めていきたい。

<課題>

「言語活動研究」の深化が残された課題であろう。「生き生きと取り組む」ことと「確かな国語の力」の育成を結びつけるには、教師の確かな指導観のもと、生徒にどのような活動をさせるのかということが勝負である。従来おこなわれてきたような教材文に関する「発問」により読むことの力の育成を狙ったり、「題材」のアイデアによって書くことの力の育成を狙ったりする指導の枠を越えなければならない。国語科教育は、今大きな転換の時期を迎えているのかもしれない。次年度以降、従来の研究の視点に捕らわれない「授業デザイン」の追究が求められる。

(文責 石田 哲太)